

コミュニケーション欲求の疎外と若者自立支援

——「ニート」状態にある若者の実態と支援に関する調査報告書を読む——

佐藤 洋 作

1. 問いと問題視覚

多くの若者が「ニート」状態に陥って漂流している。ニート（NEET：Not in Education, Employment, or Training）とは、文字通り「教育機関に在籍せず、就労もしておらず、職業訓練も受けていない者」を意味し、失業者も含めて、16歳から18歳までの青少年層の社会的包摂政策を論じる際のイギリスの政策用語である。日本でも2004年頃から使われ始め「15歳から34歳までの非労働力人口のうち、配偶者を持たず、家事も通学もしていない者」とする厚生労働省の定義によれば、我が国の「ニート」（若年労働者、2003年度）は52万人にのぼる¹⁾。

では今日なぜ、多くの若者たちが社会の入り口で立ち止まり、学校から仕事へとスムーズに移行していくことができなくなっているのか。もちろん、いわゆる若者の職業的自立過程が困難になってきている第一義的な要因は雇用削減や労働の流動化などの労働需要側の問題であり、それを「若者のやる気の無さや甘え」といった若者側の意識に求めることは不当であることについては多くの論者が指摘してきているところである²⁾。

そのことの誤りは論外だとしても、同時に社会構造にその要因を一元的に還元するだけでは捉えきれない面があることも否定できない。つまり若者の意識の深層に分け入って、彼らが社会に参加したり仕事に就くことを躊躇わせているものはなにか、意識を規定する社会構造的要因と若者自身の心理的要因との両側面から、その〈社会-心理〉機制のあり方を理解することが求められている。

とはいえ、「ニート」状態に陥った若者たちの、そこへと至る経過や生活状態、生活意識にアプローチするのは困難な課題である。若年無業者にくくられて若者支援施策対象として注目される若者たちであるが、彼（彼女）たちは社会からひきこもっているだけにその実態は見えにくく、また「ニート」状態へと至る経緯は多様であるから一律には「ニート」像を語ることは難しい。しかし、いまだその全体像は明らかにされてはいないものの、政府の若者自立支援施策の現場などから、しだいに困難な状況に陥っている若者たちの現実が見え始めている。支援機関の利用者を対象に実施され、最近報告された意識調査結果を読み解きながら、自らも若者支援の現場に身を置く筆者が若者から聴き取った声も重ね、彼らを立ちすく

ませているものは何か、その心理と社会経済的構造とのダイナミズムについて検討する。さらには、若者たちの自立とは何か、そして自立支援とはなにか、その基本的視点についても提示する。

2. 対人不安の中で立ち竦み、引きこもる若者達

1. 若者支援の現場から

①若者自立支援施策とNPO（筆者）の立場

筆者は長年にわたってNPO団体に加わりながら不登校の子どもやひきこもりの若者のためのフリースペースを運営してきており、彼（彼女）たちの進路指導が発端となり今日の若者の社会的自立支援活動につながってきている。

この間政府も若者支援施策を進めてきた。バブル崩壊後の高い失業率、増加する無業者・フリーターなど、若者を取り巻く厳しい雇用情勢があり、このような情勢が続けば、若者の職業能力の蓄積がなされず、中長期的な競争力・生産性の低下という経済基盤の崩壊や、社会不安の増大など、深刻な社会問題を引きおこしかねないという危機感をいだいた政府は、経済産業省、文部科学省、厚生労働省、内閣府の4省で2003年6月に「若者支援・挑戦プラン」を策定し、日本の若者自立施策が開始された。それによりジョブカフェの整備、キャリア教育・就職支援、日本版ジュエルシステム、若年者トライアル雇用などが実施され、その後のアクションプランと同改訂版では、フリーター25万人常用雇用化プラン、「若者自立塾」・「地域若者サポートステーション」³⁾の設置などが実施されている。このプランは2006年以降の「再チャレンジ支援総合プラン」のなかにくくられて継続されている。このプランの「行動計画」には、先の「若者自立・挑戦プラン」に、再チャレンジプランナーの配置、農林漁業への就労促進、専修学校・大学での職業教育・実践的教育などの提案が加わった⁴⁾。

筆者の加わるNPO団体も、2005年からは厚労省委託事業として「若者自立塾」を、2007年からは同じく厚労省の委託を受けて「地域若者サポートステーション」を開設して若者の支援事業を展開している。200年から開始された農水省版若者自立塾「チャレンジ！ファーム」の推進にも協力してきたし、2007年度からハローワークに配置された困難を抱える若者への「就職チューター」としてNPO職員を出向させたり、専修学校の職業講座に若者を参加させたり、連携を深めてきた。

若者の職業的自立困難の第一義的な要因が労働需要側がつくりだした社会構造的問題にあり、若者自立支援策はまず雇用創出や雇用形態・労働条件にかかわる規制や条件整備に向けられなくてはならない。「再チャレンジ支援総合プラン」においても、公務員への中途採用、有期労働契約法制整備、社会保険適用拡大、非正規・正規均衡処遇、正規雇用登用・キャリ

アアップを図る企業の支援などがあげられているものの、これらが実効性のあるものになるかどうかは今のところ明確ではなく、また若者のエンプロイアビリティを高めるためには意識の変革と言うより具体的な職業能力が重要であるが、その開発機会の整備への提案もまだまだ弱い。やはり政府がすすめるプランの特徴は、フリーター・ニートの存在は、本人の意識、意欲の不足や職業観、勤労観の未熟さによるという認識が政策の基礎にあり、まず若者の就労意欲喚起に力点が置かれており、したがって、多くの施策が就業相談支援のためのセミナーやカウンセラーの配置に重点が置かれている。

このように、この間の政府の施策は雇用構造に本格的にメスを入れるというより「若者の職業意識の涵養」を通して、若者を社会に適応させようとする限界（問題点）を持ちながらも、しかしながらそれと同時に、社会への移行の困難を抱える若者に始めて光が当てられたという面では大きな前進であった。この本来は若者雇用政策として構想されたものであるとしても、若者の社会への移行（社会化）の困難な事態に直面する若者たちへの教育・福祉政策としても機能していく可能性を見せ始めている。ひきこもりなど各種の相談支援機関の相談窓口や若者自立塾などの支援施設を利用する若者の多くは、不登校やひきこもり経験を持つ若者や、発達障害などを抱える若者たちであり、家庭の中に潜在していた彼らの社会的自立困難な実態が社会の表面に引き出されたということである。この間の若者自立支援施策は期せずして、長い年月にわたって社会とのつながりを築けないまま自閉し立ちすくんでいた若者たちに、メンタルケアや社会参加・学び直しの機会を提供する教育福祉政策の萌芽として見ることもできる。そしてこうした経験や仕事体験の場をフィールドにして「若者自立塾」などの政府の若者支援策の一端を担うこととなって現在に至っている。

②不登校以後

不登校経験者のその後のキャリア形成において、特別の支援がない限り彼らと社会との接触面はますます切れていく方向にある。しかも心理面では、自責感や無能感、後悔の念にとらわれたり、集団や人と関わるときに過剰に人の目を気にしたり、孤立感を抱きがちである。森田洋司たちの報告（文科省委託研究「不登校に関する実態調査（平成5年度不登校追跡調査結果報告書）」2001）⁵⁾でも明らかにされているように、こうした不登校経験者層が無業層として滞留していく傾向は否定できない。たとえ不登校のためのフリースペースなどに籍を置いて、今度は「フリースクール症候群」⁶⁾状況に陥りなかなか社会につながっていけない状況がある。不登校経験者が進学であれ就労であれフリースペースから次のステージに移行して行くことの困難さに直面して、不登校以後の支援は森田が言うように、私がかかわるNPO団体もカウンセリングより進路指導にあると考え、さまざまな社会と出会う体験的な学びをつくりだしてきた。彼（彼女）たちは社会参加を回避する傾向が強くなかなかアルバイトにも就けないし就いても継続できないという状況があった。社会に対する「不安（怖れ）

と自分に対する不安（自信のなさ）」といった主体的要因については拙稿「〈不安〉を越えて〈働ける自分〉へ」⁷⁾で論じたところである。2000年前後から、若者が仕事の現場にフィールドワークしてルポを書き編集する雑誌⁸⁾を発行したり、職業人を講師に招いての仕事体験ワークショップ「School to Work 講座」や「ヘルパー3級・2級講座」と受講修了後の福祉現場へのインターンシップなども実施してきた。ひきこもりの子どもや若者の身体は堅くこわばっていることが多く、他者とともに働くことを快く感じられる身体レベルからの社会化が必要であると考え農業体験も展開してきた。2004年からは農業生産物を加工流通させる若者参加の働き場としてパン製造と販売事業⁹⁾を開始している。こうした経験から生まれた講座やワークショップ、ベーカリーの工房などを仕事体験の場として厚労省委託事業「若者自立塾」、「地域若者サポートステーション」など、政府の若者施策の一端を担うことになってきた。

③支援窓口を訪れる若者たちの実態

では若者支援の相談窓口にはどんな若者が訪れるのか。一人一人本当に多様な背景を持ち分類することは難しいが、訪れるまでの経過からおおよそ3タイプないしは4タイプの若者に分類される。a. まずは「職場リタイマータイプ」である。厳しい労働現場で傷ついてリターナーしてきた若者達である。Aさんはまさに物づくり現場を漂流して疲れ果ててたどり着いた若者だった。彼は愛知のケータイ工場などを転々とした果てに、1日3000台の携帯電話の組み立て作業に従事し続け、その挙げ句電動ドリルによるネジ締め作業の能率低下を理由に解雇に追いやられた。「フリーター漂流」¹⁰⁾の世界そのままである。また、まさに「ネットカフェ難民」状態の若者も訪れる。Bさんはグッドウイルなどに登録して引っ越しや倉庫管理などの日雇い派遣の現場を転々と過ごす日々であり将来への不安を抱えこんでいるが、ハローワークを通してはキャリア不足ということで仕事にはつながれなかったため、まさに救助を求めて単なる就労支援機関ではない場を嗅ぎつけて来訪した。また大学を卒業して職場に入ったが、即戦力を求められて対応しきれず神経症的な不調に陥って離職してしまった若者も訪れる。彼（彼女）らはまさに厳しい労働現場からはじき出された若者達である。b. 次にこのタイプの若者が比較的多く来訪するよう感じているが「学卒息切れタイプ」である。学校は出たけれど就労に至らなかった若者達である。あるいは一応就労したとしても働き続けるエネルギーは既に枯渇していて短期で離職してしまうタイプの若者たちである。Cさんは高校はかろうじて卒業したが、これといった就職活動をする事なく家に引きこもってしまった。Dさんは大学を休学期間を含めて6年かけて都内の公立大学を卒業したものの内定を取り付けても就労する自信が持てないまま、自宅にひきこもってしまった。Eさんは大学卒業後に就労経験はありながらも、短期就労に終わり離職を繰り返し、とうとう就労を諦めるにいたり、このタイプに分類できるであろう。c. 最後に不登校や高校中退によって

早い時期から社会からひきこもっていた「不登校引きずりタイプ」の若者達である。Fさんは中学に入学して言葉のいじめに遭い不登校になった。高校には進むがどうしてもPTSD(心的外傷)から不安を感じた学校へは行けなくなってひきこもってしまい、20歳を目前にして母親に勧められて訪問した。Gさんは、なんとか中学校は通い続けて都立の進学校に入学したが1年で中退してしまった。高卒程度認定試験(旧大検)だけは合格して大学を目指したがその時点でエネルギーが枯渇した状態になって1年だけ引きこもった後母親に促されて来訪した。aのAさんも中学時代不登校を経験し高校は通信制で卒業しており、bのEさんも学校には通っていたものの学校での人間関係はほとんど経験してきておらず、ある意味ではaもbも一時的な不登校を経験していたりひきこもりの心理傾向を色濃くおびていたことからするとaもbもcの「登校引きずりタイプ」に含まれると言ってもいいかもしれない。さらにはこのタイプにはアスペルガー症候群などの広汎性発達障害、LD(学習障害)、精神遅滞などのいわゆる「軽度発達障害」の若者(「ボーダータイプ」)も含まれる。学校では居づらさを感じはじめの対象になった経験のある若者や、また就職活動において面接シーンで撥ねられてしまうといった経過を経て傷ついて立ち止まってしまった青年も多い。こうした「ボーダータイプ」の若者の支援のあり方については他のケースとは違う専門的な考察も必要だが本稿では検討の対象から外さなければならない¹¹⁾。

さて、支援の現場で出会う若者の表情や語りを通して浮かび上がってくる彼らの抱える困難とは何か。a「職場リタイマータイプ」の若者たちの「ニート」状態への経過が明らかになっているように、たしかに、まともな仕事場がないという社会経済的構造にこそ「ニート」問題の本質がある。しかしながら、それと同時に若者の中に広がる進路への不安感情も求職行動を妨げる障壁となっていることも、典型的なa「職場リタイマータイプ」というよりも、むしろb、cタイプに近い若者に出会うことの方が多い支援の現場の実感である。だとすれば、若者の現実に応える支援策を構想するためには、若者の進路不安がどのような〈社会-心理〉機制によって醸成されるのか、若者の内側からの理解が必要になってくる。若者の進路不安感情の基底には、おそらく単に労働環境の悪化にとどまらない多様な要因が横たわっていて、その総合的で相互連関的理解を通してはじめて、若者がどのような困難を抱え、どんな支援を求めているのか探り当てることが可能になる。

3. 若者支援機関利用者調査を読む～対人不安の中で立ちすくむ若者たち

「若者自立塾」や「地域若者サポートステーション」などの支援機関を利用した若者に対する調査報告書が2007年6月に発表された¹²⁾。支援機関や施設に参加し、しかも調査に応じた若者に限定されていることから限界はあるものの、従来にはない一定数の回答を得ており、支援機関のスタッフからの実態調査や「ニート」状態を脱した若者からのヒヤリングを

重ねると、従来は部分的に語られることしかなかった、「ニート」状態の若者についての全体的な生活・意識実態の把握が可能になってくる。

1. バックグラウンド～幅広い出身階層

まず調査は若者の年齢や生育環境などの属性を聞いているが、「貴方の家の暮らし向き」という問いに、「ふつう」が47.1%、「やや苦しい」と「非常に苦しい」を合わせて36.9%、「やや余裕がある」と「余裕がある」を合わせて14.1%が答えており、「ニート」状態にある若者の出身家庭は非常に幅広いと言える。このデータは、一般的に流布してきた「経済的に恵まれた働く意欲のない若者がニート状態になる」という認識の根拠は誤りであることを証明している。但し、回答を寄せた若者の年齢構成は「19歳以下」9.0%、「20歳～24歳」26.5%、「25歳～29歳」33.7%、「30歳～34歳」24.3%、「35歳以上」6.6%となっており、64.6%が20代後半から30代に達していることからすると、36.9%が「苦しい」と答えているとしても、親が年金生活に入って生活不安が高まってきたと受け止めているとも考えられるから、必ずしも「低所得者層の子弟がニート状態に陥りやすい」と言う解釈も成り立ちにくい。筆者の出会ったケースでも、親が年金暮らしに入り、それを転機に支援を求めてきた30代に突入した若者の存在は少なくない。しかしながら、「若者自立塾」の入所には自己負担金が必要となることから調査対象者には支払い能力のない家庭の子弟は除かれていることも考慮される必要がある。いずれにしても「ニート」状態にある若者にはあらゆる経済状態の出身者が含まれていると考えられる。

2. 学校体験～不登校、いじめ体験

進学率は同世代の水準から見て特に低いとは言えないが、「高校中退」が12%、「大学・短大中退」が12%、「専門学校・各種学校中退」が7.7%となっており、合わせると3割を超える。そして全体の37.1%が不登校（病気・ケガ以外で一ヵ月以上学校を休むこと）を経験していると答えている。しかし、高校以後では学校に行きづらくなってそのまま学校を途中で離脱した場合には「不登校」というより「中退」と自己認識していると考えられ、さらには全体の49.5%が「ひきこもり」を経験したと答えていることも合わせると「不登校」は小・中学校体験に限定して捉えているものも多く、高校以後の学校体験の中での通学困難も含めれば「不登校」経験者ははるかに拡張される。こうしてみると、不登校・ひきこもり体験者が「ニート」状態に追い込まれている若者のコアを形成していると察することができるが、これは現場の実感と重なる。

また「ひきこもり」経験の49.5%と同率の若者が「精神科又は心療内科で治療を受けた」と答えているが、若者自立塾のスタッフが入塾者の27%が「何らかの精神的な問題を抱えていた」と答えていることから、精神疾患が原因で「ひきこもり」になったケースも中には

含まれているだろうが、多くはひきこもらざるを得なかった程のストレスから精神的な不調を来し医療に掛かったと考えられる。

「ひきこもり」「不登校」の背景として、本人の「精神的な問題」が隠されているケースも含まれていることは否定できない。しかしながら 55%が「学校でいじめられた」経験があり、57.4%が「学校は好きではなかった」と答えていることから窺えるように、不登校や高校中退などの背景に学校のいじめ空間の広がりが大きく起因していることは明白である。いじめの標的になった者やいじめ空間の周辺を息をひそめて必死に生きぬいてきた者、そうした苦しい体験を語る若者は圧倒的に多い。いずれにしても彼（彼女）たちは、おそらく長い沈黙の時間の中を生きぬいて支援機関の窓口にたどり着き、ようやく支援的他者に会い安心して語り始めたのだと想像できる。

3. 労働観、職業意識～働かないのではなく働けない

調査の結果は就労経験は意外にも多い。職種は「サービス業」31.1%や「生産労務職」25.1%、「営業販売職」22.8%などの熟練を要しないアルバイト就労が目立つが、のべ雇用経験は 64.4%に上っている。但し、一週間未満の就労経験は全体の 44.1%に見られ、職場の雰囲気に入れなかったり、些細な失敗から短期間で通えなくなったケースも多いと思われるが、就労とも言えない研修的な体験やお手伝的なものもかなり含まれていると考えられる。

若者たちは不登校経験や職場での否定的な就労体験を経ており、「働く意欲を持つ」ことは難しい、あるいは「仕事はお金を稼ぐための手段であって、面白いものではない」と、どちらとも 50%近くが答えており、全体的に「仕事に多くを期待しない」意識が強いし、「将来に希望が持てない」といった閉塞的気分覆われている。しかしながらその一方で「仕事を生きがいとしたい」と 69.9%が答え、82.5%が「社会や人から感謝される仕事がしたい」と一見矛盾した労働観を表現しており、むしろこの自己実現型の仕事への憧憬の強さが逆に仕事への障壁を高くしているとも言える。また 82.8%が「仕事をしていないとうしろめたい」と感じていることもあり、いずれにしても彼（彼女）たちの就労への希望は強い。

同種の先行調査¹³⁾は、15歳から34歳までの無業者を、失業者である「求職型（失業者）」と2タイプ合わせていわゆる「ニート」にあたる「非求職型」と「非希望型」の3つのタイプに分類している。「非求職型」と「非希望型」は43万人と42万人でちょうど半々だが、2002年までの10年間で66万8000人から84万7000人と約18万人増えているが、その内訳は「非求職型」が17万人増えているのに「非希望型」は1万人しか増えていない。このデータからこの間の雇用状況の厳しさから求職行動を控えている「非求職型」の若者が「ニート」の若者の層を押し広げているとする解釈がある。しかしながら、今回の調査からも読みとれるように、多くの若者は「今のところ働く意欲が持てない（非希望型）」までも「いつかやりがいのある仕事をしたい（非求職型）」と希望しており、「条件が整えば求職活動をしたい

(求職型)」と考えている。従ってこの3タイプの境界線は固定的なものではなく、相互に行き来している可能性は高く動的な把握が必要であり、無業状態にある若者はおしなべて「働かないのでなく、(今のところ)働けない」若者たちだと言える。

4. 突出している対面コミュニケーションへの苦手意識

支援機関を訪れる若者たちが仕事の世界に入っていけない要因として訴えるのは、まず対面コミュニケーション場面での緊張感である。そうした苦手意識は調査結果とも符合していて、就労の障害となると思われる基本的スキル6項目のうち「人に話すのが不得意」が64.4%で突出している。他の5項目は「字を読むのが不得意」19.1%、「字を書くのが不得意」35.6%、「計算するのが不得意」42.8%、「手先が不器用」47.6%、「人の話を聞くのが不得意」34.7%となっている。今回の調査の中で行われた脱「ニート」の若者へのヒヤリングでも、「ニート」状態に至る経緯に対する面接者たちの見立ては、以前からの「希薄な人間関係」が大きく影響を与えているという捉え方で共通している。

また別の先行調査¹⁴⁾においても、「なぜ求職活動をしてこなかったか」という問いに対して、「ニート」状態の若者の43.1%が「人づきあいなど会社生活をうまくやっつけられる自信がないから」と答えている。この調査結果をふまえて、玄田有史は仕事の中で人間関係を円滑に進めていく自信が欠けていることが彼(彼女)たちが働こうとしない根本的な理由であると論じているが、今度の調査結果もそれを改めて確認した形になっている。

短期での離職の背景には、即戦力を求めるなど今日の厳しい労働事情が若者を支え育てる余裕を職場環境から奪っているという側面があるだろう。しかしながら、41.4%が経験したと答えている「職場の人間関係のトラブル」の内実は明確ではないが、おそらく就労以前からの対人関係づくりの弱さや不安感情が影響して、就労後の職場での人間関係も困難なものにしている側面も否定できないだろう。だから未だ就労経験もない者も含めて、職場で「上司から信頼されない」が66.7%、「友達を作る自信がない」が66.7%にも上り、実に80.9%もの若者が「仕事をしていくうえで人間関係に不安がある」と答えている。学校体験での対人不安は克服されることなく職場に於ける人間関係の緊張感や不全状況に浸透して、若者を萎縮させていると言える。

では対人コミュニケーションに苦手意識をかかえ、対人不安から仕事の世界の前で立ちすくんでいる若者をどのように支援したらいいのか。若者の自立支援の基本的構造について提示する前に、若者たちのに對人不安を呼び起こす現代の対人関係のあり方についてもう少し検討を加えたい。

4. 対人不安を越えてコミュニケーションをひらく

1. 「いじめ」を誘発する屈折した「友達関係」

「ニート」状態に陥った多くの若者たちが訴える対人コミュニケーションへの苦手意識とは何か。おそらくその苦手意識とは、いじめのターゲットになるかはいじめ空間の周辺を生きてきたことで心に刻印された対人不安の感情である。現代の「いじめ」という教育病理の背後には対人関係の病理が潜んでおり、「いじめ」の本質を語ることは対人不安をもたらす人間関係の本質について語ることになる。「いじめ」体験は「対人不安」を引きおこし、「対人不安」は「いじめ」を誘発する。

個人をターゲットに孤立無援状態に追いやり死に至らしめるほどの陰湿さを現代の「いじめ」は特徴するが、一見すると馴れ合っているだけの「友達関係」の中で発生するから大人には見えにくい。その「友達関係」は異様なほどの相互配慮によってかろうじて維持されている不安定な関係性だから一度破綻すると修復は難しい。土井隆義は深刻な今日の子どもの事件の背後に子どもたちを追いつめている「友達関係の重さ」を読みとる¹⁵⁾。本来の友達関係とは対立や葛藤を繰り返しながら形成されていくものであるが、今日の「友達関係」はその顕在化を避けることでかろうじて成り立っている脆弱な関係性である。おそらく現代日本の際だった競争的秩序が子どもたちの生活世界をも熾烈な生存競争の場へと変容させていったことが、子どもたちの友人関係を複雑で屈折したものに歪め、脆弱なものにしているに違いない。学校では選別の教育が深く根を下ろし、厳しい規律と教師への忠誠競争によって管理が強化され、子どもたちの中には嫉妬心や恨み心などの屈折した心理が形成される。そのような感情を表出することは地雷を踏むようなものだから、必死に「素の自分」を押し隠し「いい友達」を必死に演じながら集団規範に過剰に同調せざるを得ない。過同調への強迫的な圧力がかけられ、相手の反応を読み違えると関係は直ちに破綻し、集団規範とずれる行為は「いじめ」のターゲットとなる。脆弱な「友達関係」を維持するためにスケープゴートに供されるのである。そして「いじめ」脅迫が人間関係をますます不安で緊張感に満ちたものにし、その不安が更に「いじめ」を誘発する。

屈折した「友達関係」を通して対人不安や恐れが刻印される。その不安感情は克服されることなく対人コミュニケーションへの苦手意識の中に生き続け、若者たちの社会参加を阻害することになる。安心感の持てない気遣いに満ちた不安定な関係性の中でエネルギーを消費し、疲弊し、自分たちの外の世界に気を回す余裕を喪失しているのかのようである。

2. 「コミュニケーション能力」への要請

現代の若者のコミュニケーションへの苦手意識は、今日の社会が「コミュニケーション能

力」を要請しているという事情の反映でもある。書店には「人を動かす「言葉力」「できる人の話し方」といったタイトルの付けられたビジネス本が並び、いわゆる「コミュニケーション能力」が不足していると現代社会では「負け組」になるしかないという言説に溢れている¹⁶⁾。「元気で、明るく、社交的な」人物像が評価される風潮に圧倒されて、若者たちがますます自らの「コミュニケーション能力」への苦手意識を深めているという側面も見逃せない。事実「重視される社員の選考基準」において「コミュニケーション能力」は高い順位を占めており、マスコミに登場するIT関連、株式市場で法外な利益を手にした若手実業家はいかにも「コミュニケーション能力」が高かそうに見える。熊沢誠が指摘するように、そもそも日本企業の仕事管理の特徴は、労働者に仕事態様の変動してもそれにフレキシブルに適應できる潜在能力や生活態度や協調性などの情意（態度、性格）を評価するところにあり¹⁷⁾、こうした「日本の能力主義」が「コミュニケーション能力」要請の背景にある。同時に現代では営業スタッフや販売店員、さらには福祉などの対人サービス専門職など、ヒューマン・スキル（コミュニケーション能力）が不可欠とされる仕事分野が相対的に増加していることも、若者のコミュニケーション不安をより増幅させ、求職意欲を押しとどめている要因になっているかもしれない。

しかしながら、コミュニケーションとは人と人が言語や身振りを通して対話し相互に合意形成していく社会的行為であるとするならば、その場のコミュニケーションを成立させるのは、個々の「コミュニケーション能力」というよりは対話的な関係性ということになる。だとするならば、たとえ寡黙なパーソナリティの若者であったとしても、対等な対話と討議によって組み直された一人一人の持ち味が生かされる関係性の中では、寡黙であるか雄弁であるかはたんなる個性の違いに過ぎないものになるはずである。職務を遂行し行くための必要とされる「コミュニケーション能力」があるとしたならば、その職場の仲間との共同的な労働関係の中で自然な形で醸成されるはずである。本来のコミュニケーション関係が疎外されていることこそが「コミュニケーション能力」を貧しいものになっている。

3. 自己イメージの不確かさ

コミュニケーションの苦手意識（対人不安）と並んで、自己への不安とっていいような漠然とした不安感情が若者たちを立ちすくませている¹⁸⁾。

強迫神経症に苦しむ若者に「何かやりたいことはないのか？」と主体的な行動を促すと、「別にない。何をしたらよいか教えて！」と逆に問い返してくる。必死に周囲に適應することで汲々としてきた若者には〈何かをやりたいと欲求する自己〉が育てられてきていない。欲求主体としての〈自己イメージ〉が不確かであるということである。本来〈自己イメージ〉は他者との相互承認的な関係性を通して成立するものである。しかし対人不安に覆われた敵対的な関係性の中では信頼して安心できる〈他者イメージ〉が形成されず、それゆえに他者

との相互承認的關係の中で像を結ぶはずの肯定的な〈自己イメージ〉も形成されてこないの
である¹⁹⁾。

この事情が若者のコミュニケーションを表面的、断片的なものにしており、コミュニケーションが対話的に発展的していくことを妨げている。〈自己イメージ〉が未成熟である限り、自分にとっての体験を物語性のある意味あるエピソードとして語るができないから、コミュニケーションは相手に合わせたような手応えのないものにならざるをえず、意味あるコミュニケーションに深まることはない。自分の体験を物語れない、あるいは自分の体験がこころの中で物語になっていないのであれば、葛藤すら生じない。自分の体験が自分の本質的な何者かと違和感を生じ、無意識のうちに無理している自分を感じるからこそ、苦悩し、苦しみ、その結果、葛藤状態に陥るものだからである²⁰⁾。悩み葛藤する主体が未形成である限り若者たちは前へと歩み出すエネルギーを持ち得ることはできない。

家庭が母子密着化し、学校教育や子ども文化が競争的性格を深めていくの中で幼児から大人へと移行していく現代の若者たちは、多様な対人関係やさまざまな活動を奪われおり、豊かな対人関係を通してはじめて内在化するはずのさまざまな〈他者イメージ〉や〈自己イメージ〉が形成することが困難になっていることは言うまでもないであろう。

土井隆義はまた、〈自己イメージ〉の揺らぎについて現代の人間が自己評価基準としての社会的規範や価値観を持ちえなくなった社会状況から論じている。昔は関心対象も重なり合う部分が大きくその人間関係は安定的で他者との対立点も顕在化しにくかったが、現代では価値が多様化してきている分、自己の行動基準は自分の内部に求めるほかなく、一人ひとりが〈自分らしく〉ふるまうべく強迫される。生理的感覚としての〈自分らしさ〉は断片的で、拡散しがちで、不安定なものであり、状況によって移ろいやすいものであるから、自分の行動基準に脈絡がつけられず安定的な〈自己イメージ〉を持ちにくい²¹⁾。行動基準を内面化することも肯定的な〈自己イメージ〉を形成することもできないまま、若者たちは漠然とした不安感情に圧倒され立ちすくんでいる。

4. 心理主義化する〈自分探し〉

〈自己イメージ〉の未成熟状況は若者を不安に陥れるから、〈自分探し〉は切実な要求となる。競争的な人間関係を越えて相互承認的な他者と出会うことなくしては肯定的な〈自己イメージ〉を形成することはできず、〈自分探し〉は遂行していくことはできない。しかし、今日の学校は新自由主義的な「教育改革」によって新たな能力主義的な選別システムに再編されようとしている。早期からの「自由な選択」を通して、個性や自己実現を称揚しているように見え、実は経済界が準備する「多様な働き方」の中に子どもたちが自発的に適応していくことを求めていくようにつくりかえられようとしているのである²²⁾。〈自分探し〉とは本来、社会的現実と対峙しながら他者との出会いを通して達成されるものである。つまり肯定的な

〈自己イメージ〉は他者や自然と応答しあい対話しながら、自分たちの世界を立ち上げ、その中で自分の役割や独自性に気づきながら培っていくものである。だから対話的な関係のリアリティの中でつくりあげていくものであって、自分の内面の中にもともと存在するものではないはずだ。こうした自己の内面へと向かう〈自分探し〉の心理主義的あり方は、人間がアトム化され共同性が衰退してきた社会状況の中で急速に浸透してきたものである。若者の〈自分探し〉はますます心理主義化してきており、仲間との対話的な関係性の中で遂行していくことができず、社会化していくことが出来ないでいる。

社会的現実に向かって仲間と共に連帯して向き合うことなく自分の内面に向かう〈自分探し〉は、結局、自分が生きていく上でのさまざまな困難を自分の責任に還元していくしかない²³⁾。支援機関の窓口を訪れる若者たちは驚くほど従順であり、批判的理性や連帯感が形成されない弱さを抱えているように感じられる。自らの離職がどんなに労働環境の劣悪さから帰結されたものでもその原因を自分の中の「性格の弱さ」に求めようとする若者が多い。こうした若者の心理的特徴が「ニート」状態から脱出していくことを押しとどめている主体的な要因となる。「本調査」で脱「ニート」者へのヒヤリング調査にあたった臨床心理士たちの調査報告にも、人格的印象として、人や活動に対する「受動性」が挙げられている。人の意見に身を任せるといった受動性が、「何をしたいとかがないから」仕事に就きたいとしてもどうしていいのかわからないといった「生きていくこと」への欲求の少ない行動として表出される。

5. 潜んでいるコミュニケーション欲求

若者たちがまず口々に訴えるのは対人不安感情と並んで、この「何をしたらよいか分からない」という方向感覚のなさである。彼らは今のところ「やりたいこと」がないから職に就かず、フリーター生活を続けながら〈やりたいこと探し〉をしているという若者のタイプとは必ずしも重ならない²⁴⁾。学校キャリアも不十分であり履歴書を書こうにも「引きこもっていた年月」という〈空白〉をどう埋めたらいいか悩みを持つ彼らには、〈やりたいこと（職）探し〉など叶わぬものと諦めているのか、意外にも職種へのこだわりは弱い。現代の若者たちが仕掛けられた競争的な〈自分探し〉の中で心理主義化して行き、その結果ますます出口の見えないまま自閉していつている状況については既に触れた。窓口を訪れる若者たちの方向感覚のなさの背景にもこうした心理傾向が潜んでいることは言うまでもないが、彼（彼女）たちにはそもそも〈やりたいこと〉を求める〈わたし〉が根っ子のところで育っていないから、〈やりたいこと探し〉の段階にも至っていないということかもしれない。「～をやりたい！」という風に主体の欲求が社会化されないまま、自分の内面に向き合えば合うほど「なにもやりたいことがない」不安に押し潰されているという感じである。他者との共同的關係性を通してしか〈やりたいこと〉も見えてこないのである。

何もやることのないままに孤立している若者にとって、自己の不確かさは耐えられないほどの不安感情を呼び起こすから、それだけに彼（彼女）たちの他者との出会い願望は切実なものがある。意外にも若者たちはその寡黙な表情の深層に他者とのコミュニケーション欲求を潜ませていて、口を開きだすと思いの外に饒舌であることに驚かされる。若者のコミュニケーションへの苦手意識とはコミュニケーション欲求が疎外されている状況への主体的な反応であると言える。「いじめ」には誰かをいじめることによって仲間を確認し合っている歪められた形ではあるが共同性への欲求が隠されており、コミュニケーションとは人が人と言語や身振りを通して対話し相互に合意形成していく社会的行為であって、社会的・集団的存在としての人間の本来の欲求であるとするならば、「いじめ」とはコミュニケーション欲求が疎外されることで表出され人間関係の病理であるということになる²⁵⁾。

他者との出会いを回避して長年にわたってひきこもり生活を続けた果てに、若者たちはまずは人との出会いを求めて窓口にやってくるように思われる。コミュニケーション欲求の充足の向こう側に仕事の世界と出会っていく回路がひらかれていくはずである。

5. おわりに——若者自立支援への基本的視座

若者の側から表出されるニーズを受け止めるということが若者支援の基本であることは言うまでもなく、有効な支援のためにはその対象となる若者の種別化と絞り込みとそれぞれのニーズに対応した個別具体的な支援策が必要となるであろう。しかしながら支援機関を訪れる若者に対する支援の基本的枠組みは共通している。若者たちのニーズは、心に抱く〈やりたいこと〉の達成に向けたキャリア・カウンセリングにあると言うよりは、むしろ〈やりたい自己〉が不確かである不安を解消するためのコミュニケーション欲求の充足にある。であるならば支援の基本的構造は〈やりたいこと探し〉支援へと直接的に進むのではなく、〈やりたいことづくり〉に向けて若者と支援者が共同して模索する関係（場）をつくりだすことであり、その共同的作業を通して若者自身が〈やりたい自己〉へと自己形成していくことを支援することであろう。支援的他者に媒介されて、長い間自分を苦しめてきた周囲への同調のための「垂直的なコミュニケーション」を、同時代を生き抜いてきた若者たち間の相互理解と承認のための「水平的なコミュニケーション」へと組み替えていくことが若者支援の基本ベースにならなければならない²⁶⁾。この組み替えのプロセスは、他者を排してでも孤立した自己選択・自己責任によって生きぬくという競争的な関係性を、他者との対話・連帯によって相互に支え合いながら自己選択・自己決定していくという共同的な関係性へと、自分の生きる場を編み直していくプロセスである。その場を通して、若者たちは、内なる支援的他者に出会い、仲間に出会いながら、新たな自己（肯定的な自己イメージ）を生み出していく。支援とは、アメリカの精神科医のジュデス・ハーマンに倣えば「失われた他者との関係を取

り戻すことであり、信頼できる内なる他者イメージの回復、自己の肯定的なイメージの発展を支えること」であろう²⁷⁾。また「若者自立支援」の意味する「自立」とは、他者に依存することなく自助努力によって存立するという自立という意味合いではなく、他者との相互性によって存続するという意味合いとして捉えられなくてはならないのは言うまでもないだろう²⁸⁾。

こうした支援プロセスに「就労体験」や「職業訓練」などにかかわるプログラムが有機的に組み込まれ、一人ひとりの自発的な「求職活動」へと発展していくならば、「若者自立支援」施策ははじめて、若者の本来の自立を支える有効性を持ちうるであろう。

各地に設置されている若者自立塾やサポートステーションなどの支援機関では、設備や人的体制の不十分さにもかかわらず、若者のニーズに応えるさまざまなプログラムが作りだされている²⁹⁾。

注

- 1) 児美川孝一郎「フリーター・ニートとは誰か」(佐藤洋作・平塚眞樹編著「ニート・フリーターと学力」所収, 明石書店, 2005年)
- 2) 本田由紀他「「ニート」って言うな!」(光文社新書, 2006年), 乾彰夫編著「不安定を生きる若者たち」(大月書店, 2006年)など参照。
- 3) 「若者自立塾」とは、相当期間、教育訓練も受けず、就労することもできないでいる若年者の方を対象に、原則3ヵ月の寄宿形式による集団生活の中で生活訓練、労働体験等のプログラムを実施し、社会人・職業人としての基本的能力を獲得し、働くことについての自信と意欲を身につけようとするもので、現在全国39箇所厚労省の委託事業としてNPO団体などが開設。「地域若者サポートステーション」とは、地方自治体の推薦に基づき厚生労働省からの委託を受けたNPO団体等が現在全国50箇所開設している総合相談機関。
- 4) 横井敏郎「青年の進路支援実践と新しい社会構想」(「教育」2007年9月号掲載, 国土社)参照。
- 5) 森田洋司編著「不登校-その後」(教育開発研究所, 2003年, 所収)
- 6) 鍋田恭孝「学校不適應とひきこもり」(「こころの科学」1999年9月号掲載, 日本評論社)参照。
- 7) 前掲, 佐藤洋作・平塚眞樹編著「ニート・フリーターと学力」所収。
- 8) 季刊雑誌「新しい生き方・つながり発見マガジン-「カンパネラ」」(1999年~2002年, ふきのとう書房)
- 9) コミュニティ・ベーカー「風のすみか」の開設経過については, 佐藤洋作編著「風のすみかによくこそ」(ふきのとう書房, 2005年)参照。
- 10) 2005年2月5日のNHKスペシャル「フリーター漂流」で, 人材派遣で携帯電話などの製造工場を転々とする若者の切実な姿が映し出され衝撃を呼んだ。
- 11) 間宮正幸「若者が生きること働くこと」(「教育」2007年12月号, 国土社)参照。
- 12) 「ニートの状態にある若年者の実態及び支援策に関する調査研究」厚生労働省, 宮本みち子座長, アンケート被調査者数: 支援機関418名, 若者自立塾409名, ヒヤリング被調査者数: 28名
- 13) 内閣府「青少年の就労に関する研究調査報告」2005年7月
- 14) 厚生労働省委託研究「若年者の職業生活に関する実態調査(無業者調査)」2003年

- 15) 土井隆義「個性」を煽られる子どもたち」(岩波書店, 2004 年) 参照。
- 16) 山田昌弘氏は, 自由度が増した社会ではコミュニケーション能力を持っている人が, 教育, 仕事, 家庭において自分が意図する人生を送る確立が高まると論じている。山田昌弘「格差社会スパイラル」(大和書店, 2007 年) 参照。
- 17) 熊沢誠「能力主義と企業社会」(岩波書店, 1997 年), 「格差社会ニッポンで働くということ」(同, 2007 年) など参照。
- 18) 自己への不安感情については, 前掲, 拙稿「〈不安〉を越えて〈働ける自分〉へ」を参照。
- 19) 競争的な発達環境のなかで敵対的人間関係へと歪められてしまった人間関係の病理から他者への不信を深めてしまった子どもたちはまた自己への信頼も喪失する。折出健二「市民社会の教育」(創風社, 2003 年) 参照。
- 20) 鍋田恭孝「変わりゆく思春期の心理と病理」(日本評論社, 2007 年) 参照。
- 21) 土井隆義, 前掲「個性」を煽られる子どもたち」参照。生きることの意味や自分らしさを問い始めた現代の若者の揺らぎはギデンズの「存在論的不安」に通ずる。アンソニー・ギデンズ「モダニティと自己アイデンティティ」(三省堂書店, 2005 年) 参照。
- 22) 子どもたちは学校教育においても, 早期からの「自由な選択」による〈自分探し〉によって, 個性や自己実現を称揚しているように見え, 実は子どもと若者たちは経済界が準備する「多様な働き方」の中に自発的に適応していくよう仕向けられている。〈自分探し〉の心理主義化は, 新自由主義的な「教育改革」による学校システムの再編によっても仕掛けられている事情については, 竹内常一「少年期不在」(青木書店, 1998 年) 参照。
- 23) ネオリベリズムが席卷する競争社会を生き延びるための対人スキルを要請する安易な心理主義は, 問題を自己責任にすりかえる欺瞞性について, 小沢牧子「心を商品化する社会」(洋泉社, 2004 年), 小池靖「セラピー文化の社会学」(勁草書房, 2007 年) など参照。
- 24) 若者の〈やりたいこと探し〉の心理機制の現実逃避的な危うさについては久木元真吾「「やりたいこと」という論理」(「ソシオロジ」48-2, 2003 年) 参照。
- 25) 「いじめ」にも, 誰かをいじめることによって仲間を確認し合うという歪められた形ではあるが, いじめ行為の深層には人間本来の共同性欲求が隠されている。尾関周二「現代コミュニケーションと共生・共同」(青木書店, 1995 年) 参照。
- 26) コミュニティの中の権力性を突破して「市民のことば」を磨きだしていくコミュニケーションの組み替えについて, 竹内常一「読むことの教育」(山吹書店, 2005 年) 参照。
- 27) J・L・ハーマン「心的外傷と回復」(みすず書房, 1999 年) 参照。
- 28) 若者自立支援の意味する「自立」とは, 他者に依存することなく自助努力によって自分のことは自分でするという意味合いではなく, 他者との相互依存的な関係によって支えられながら自分でできるという自立として捉え直されなくてはならないことはもはや明らかであろう。折出健二, 前掲「市民社会の教育」参照。
- 29) 前掲「ニートの状態にある若年者の実態及び支援策に関する調査研究」報告書参照。

—— 2007 年 11 月 6 日受領 ——